

わが国の国語教育は間違っている

昭和二十六年九月、東京教育大学で開催された全日本国語教育協議会の小学校部会で、「わが国では明治以来、“学校”という言葉は、社会には実在しない“ガクカウ(戦前)”“がっこう(戦後)”という表記で指導してきたが、初めから“学校”という漢字で教えた方がよいのではないか」

という意見を、私は発表しました。

しかし、このような意見は、教師の判断を越えたものであったためか、聞き流されただけで質問も意見も全く出ませんでした。その上、私は当時東京都内で指導主事という仕事についていたため、「文部省の基本的な方針を批判するなど、指導主事としてあるまじき行為である」というお叱りを上司から受けてしまいました。

「確かに、指導主事としては逸脱した行為であった」という思いと同時に、「この際自分の考えを実験によって確かめてみたい」という気持とで、小学校教員免許状を取り、昭和二十八年小学校教師となり、一年生を担当、初めから“山”、“川”、“学校”という漢字で教えてみました。

この時の私の考えは、初めから漢字で教えるのは、「それが“かな”よりやさしいから」というのではなく、「教育とは、社会で標準とする正しいものを教えるべきものであり、学習の難易によって左右されるべきものではない」という考えでした。

その根底には、次の考え方があります。

“がっこう”という表記が社会には実在しませんから、その表記を学習して身に付けても、教科書以外にはそれを活用し、学習したことを深める場がありません。せっかく学んだものが社会で用をなさないのは勿論、そのため真の読み書き能力が育たないのが問題です。“学校”だと、初めは難しくても、身の回りにそれが沢山存在していますから、自然と読む機会があって能力が育つはずです。……そういう考えがありました。